

## 水害で被災した油彩画の応急処置（初期対応）について

東京藝術大学 木島隆康（2011.4.22.）

・水害で被災した油彩画（油画）で一番の問題は、淡水、海水にかかわらず、いったん水濡れしたキャンバスが乾燥する過程で、もっともひどい傷みが生じることである。

・それは、濡れた油画が乾くときに、下地のキャンバスが劇的に縮んでしまうために、絵具層がその縮みについていけなくて、浮き上がってしまい、ひどい場合には完全にキャンバスと絵の具が別れてしまうこともあるからである。

-----  
以上のような傷みを極力抑制するには、以下のような工程に従って初期対応を行う。

- （1）被災した場所から、キャンバス（画面）を上面にして、水平に保ちながら、そっと安全な場所に移す。
- （2）水平な安定した台などの上へのせ、額縁がある場合は、工夫しながら、そっと額をはずす。
- （3）木枠へキャンバス地が張ってある張りしろには、通常、釘がうってあるが、ひどいときは釘のところのキャンバス地が破れそうになるまで、ひっぱられている場合もある。このとき、釘や鉋で固定されていない部分のキャンバス地は、中央にひっぱられてしまっているため、キャンバスは波打ってしまっている場合が多い。
- （4）ここで重要なのが、できるだけキャンバス地の縮みをおこさせないように、キャンバス側面の耳（鉋がうってある側面の部分）に、1cmおきくらいの間隔で、とにかくたくさん画鉋を打って、キャンバスの縮みを抑えることである。この作業がもっとも急務となる。
- （5）キャンバス地を固定している釘がいったん外れてしまうと、キャンバス地が無制限に縮み、支持体から絵の具が全部はなれてしまうこともある。
- （6）したがって、水平にした状態で、絵が乾く前に、できるだけ画鉋をうってキャンバスの耳をおさえることがもっとも大切である。
- （7）たとえ、すでに乾いてしまっていて、かなりキャンバスが縮んでしまっている場合でも、あきらめずにやはり耳の部分にできるだけ画鉋をうって可能な限り、キャンバス地の縮みをおさえることが大切である。
- （8）あるフロアの油画が被災してしまった場合、被災していないフロアなどに油画を水平にした状態でそっと運搬したうえで、以上のような応急処置を行うとよいだろう。

（9） このあとの処置は、専門家に委ねる。

（10） 乾燥させるときは、極力ゆっくりと乾燥させるのがよい。

- ・ もし、塩水の影響でカビが生えにくいとしたら、（乾燥させる時間に猶予があるので）画面に接触しないようにして、シートでカバーするなど、急激に水分がとばないようにするのがよい。塩が残るのはこの際、致し方ない。
- ・ 淡水でカビが生え始めている場合は、可能であれば、脱酸素剤（RP システム K タイプ）とともに、酸素バリア性のある包材にシールするなどして、ゆっくり乾燥させる。この場合も、包材が画面に接触しないようにする。

<必要なもの>

大量の画鋸、  
額をはずすための道具、  
清浄なポリエチレンシート  
ポリエチレンシートを固定するためのテープ類  
（カビがひどい場合には、脱酸素剤 RP システム K タイプ、酸素インジケータ、  
酸素バリア性のある包材、ヒートシーラー もあるとよい）

<参考になる文献、資料>

- ・ 京都造形大学内田先生が編集中のハンドブック